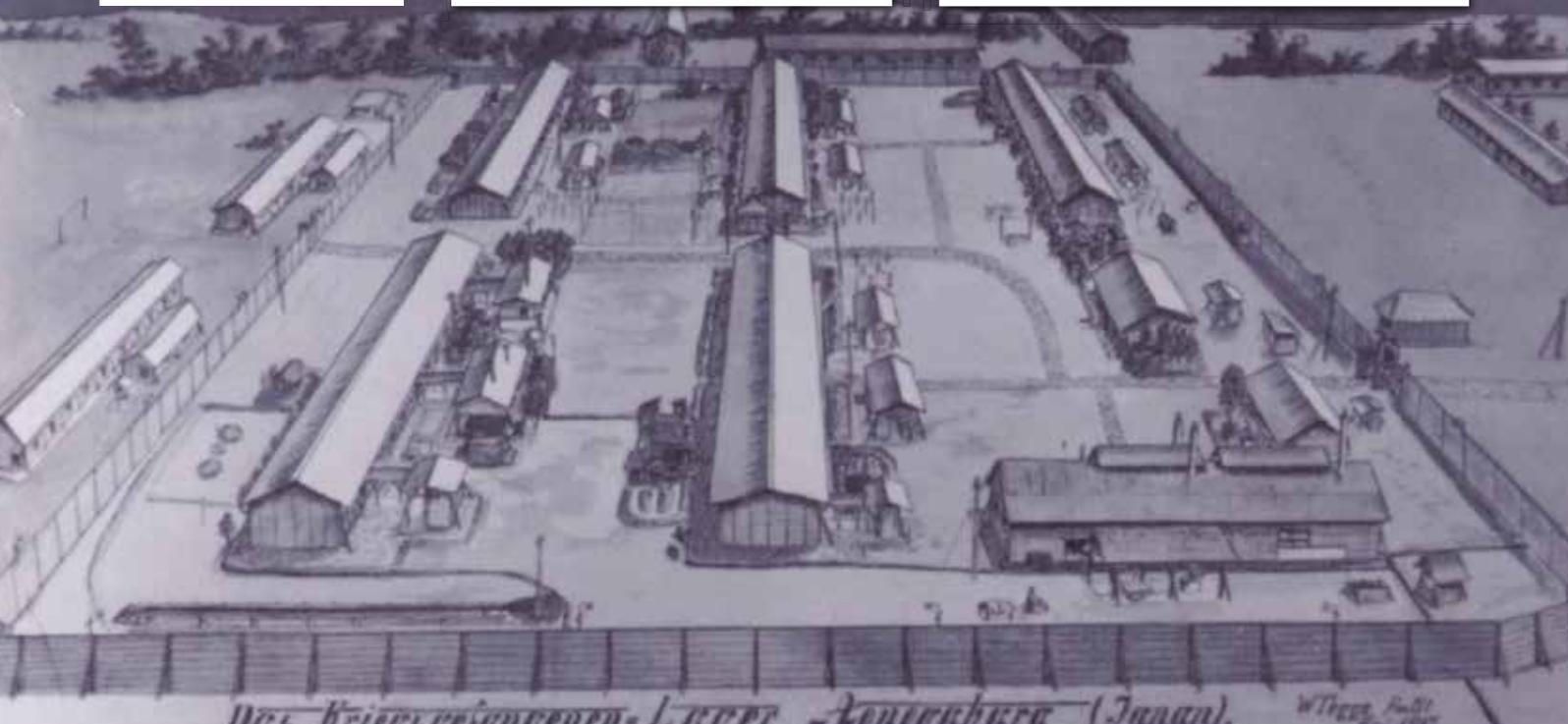
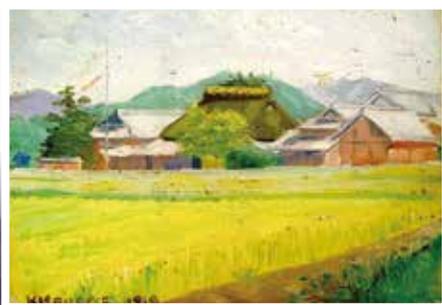




青野原捕虜收容所と

POW camp AONOGAHARA in Kasai

加西市



青野原捕虜収容所

今から100年ほど前になりますが、第一次世界大戦の時に加西市の青野原町に捕虜収容所が置かれ、約500人の捕虜が生活していました。第一次世界大戦は、ドイツ、オーストリア、トルコなどの同盟国とフランス、イギリス、ロシアなどの連合国との間で、主にヨーロッパを舞台に戦われた戦争でした。

日本はそのころイギリスとの間で同盟関係を結んでいました。東アジアでは中国の山東半島にドイツが植民地を持っていました。特に青島軍港はドイツ海軍の重要な基地になっていました。日本はイギリスとの同盟関係に基づいて、1914年10月から11月にかけて青島のドイツ軍基地を攻撃して勝利しました。その時に捕虜にした約4,700人のドイツ軍とオーストリア軍の兵士が日本に移送されました。初めのうち捕虜たちは寺院など臨時の施設に収容されていました。しかし戦争が長引くと、臨時の施設では捕虜たちの生活が不便になってきました。そこで日本政府は1915年になって本格的な収容施設を作り始めました。その一つが青野原に作られ、それまで姫路や福岡で収容されていた捕虜たちが移ってきました。その数は500人ほどでした。

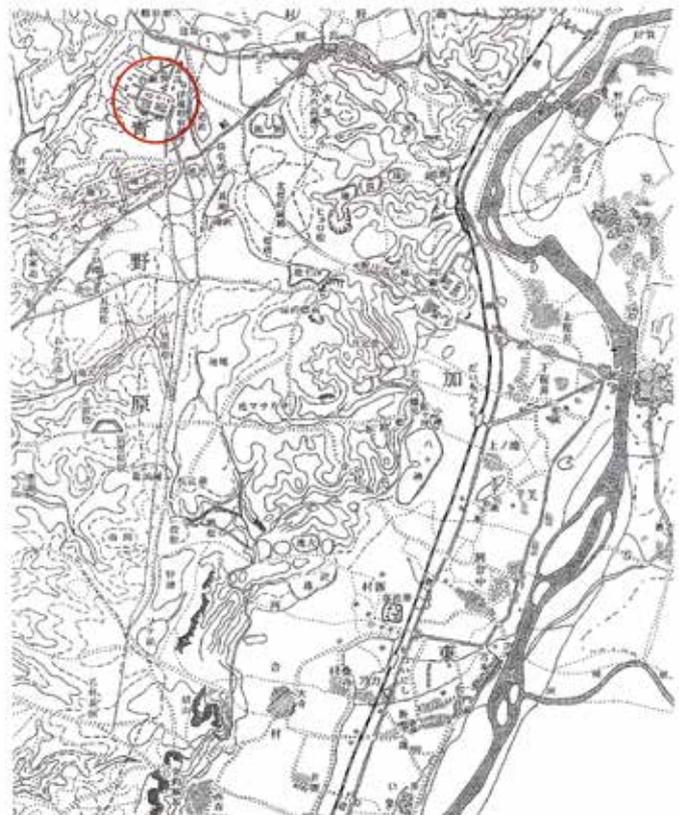
当時のオーストリアはドイツ語、ハンガリー語、チェコ語など11の言語が使われていました。皆さんが住んでいる加西市の中に突然いろいろな言葉を話す人たちが生活を始めたのです。青野原の収容所の中で捕虜たちはどんな生活をしていたのでしょうか。捕虜たちが書き残したものや写真や日本側の記録などを参考にして、捕虜たちの生活と加西市の人たちとのかかわりを見てみましょう。

2019年1月15日

大津留厚(神戸大学・名誉教授)



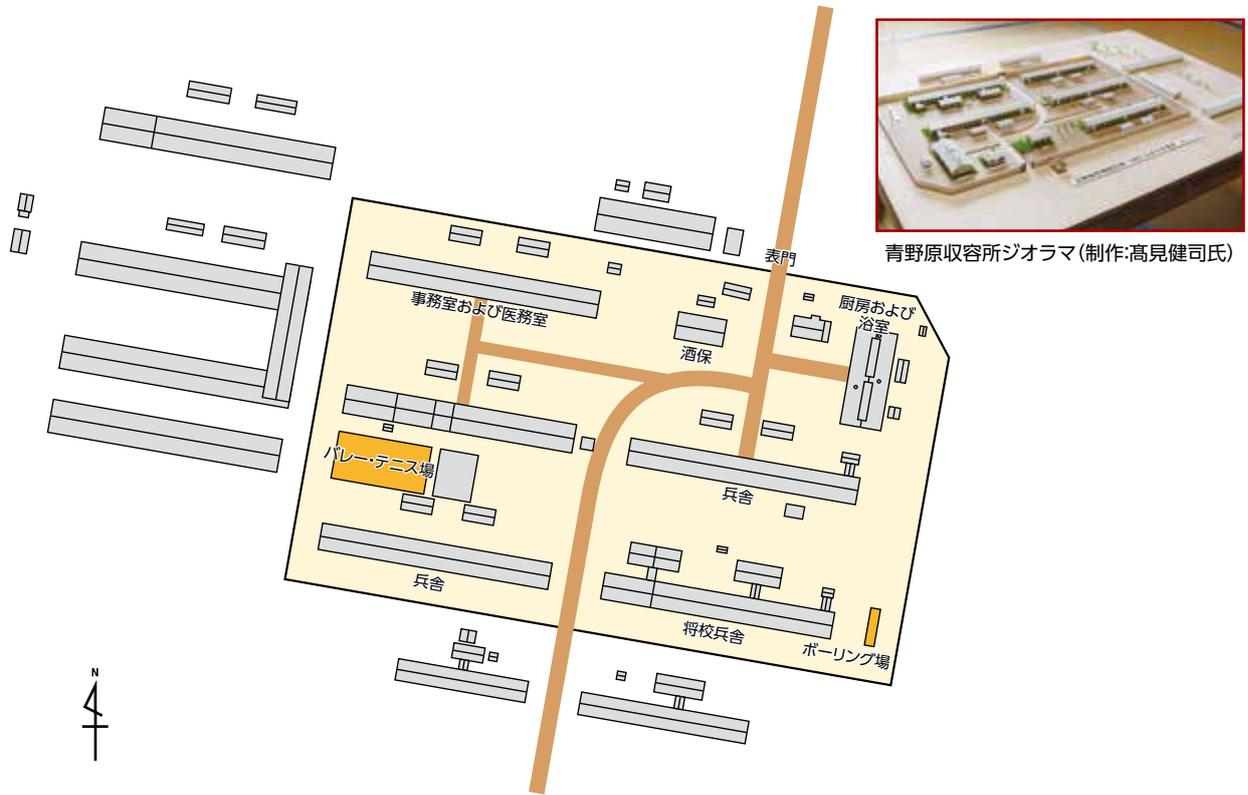
▲ 青野原の位置



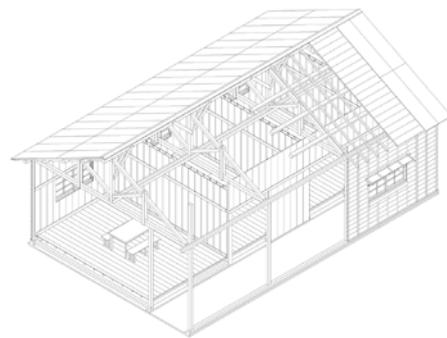
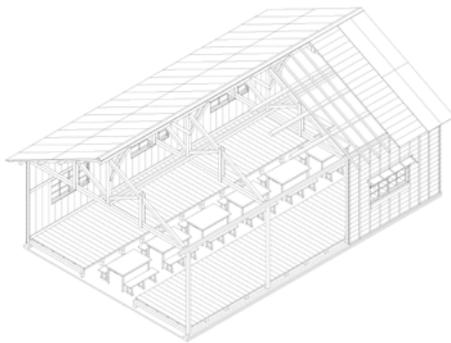
▲ 青野原捕虜収容所の位置

青野原捕虜収容所

青野原の地に建設された収容所には、地位の高い将校しょうこうが暮らす宿舎(バラック)と一般兵が暮らす宿舎しゅうほがあり、事務室と医務室ちゅうぼうがある建物や、厨房と浴室として使われた建物、そして酒保と呼ばれる売店もありました。



▲青野原捕虜収容所内の配置図



▲一般兵用のバラック



▲将校用のバラック

青野原捕虜収容所の様子

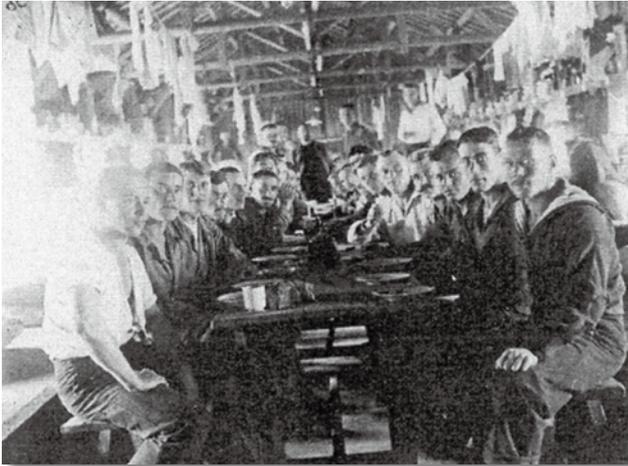


▲ 当時、「スペインかぜ」と呼ばれるインフルエンザが世界的に大流行していたので、衛生面を考慮して、布団を天日干していました。

▲ 捕虜たちはいくらかお金を持つことが許されていたので、酒保(売店のこと)で買い物をすることもできました。

食 事

捕虜たちの食事は、捕虜自身によっても調理されてきました。ただ、捕虜たちに提供された食料品は十分な量ではなかったようです。そのため、捕虜たちは何度も食事の改善を要望していました。特に、配給されたパンの質や量について不満を持っていました。



▲ 食事の様子と収容所内の調理場

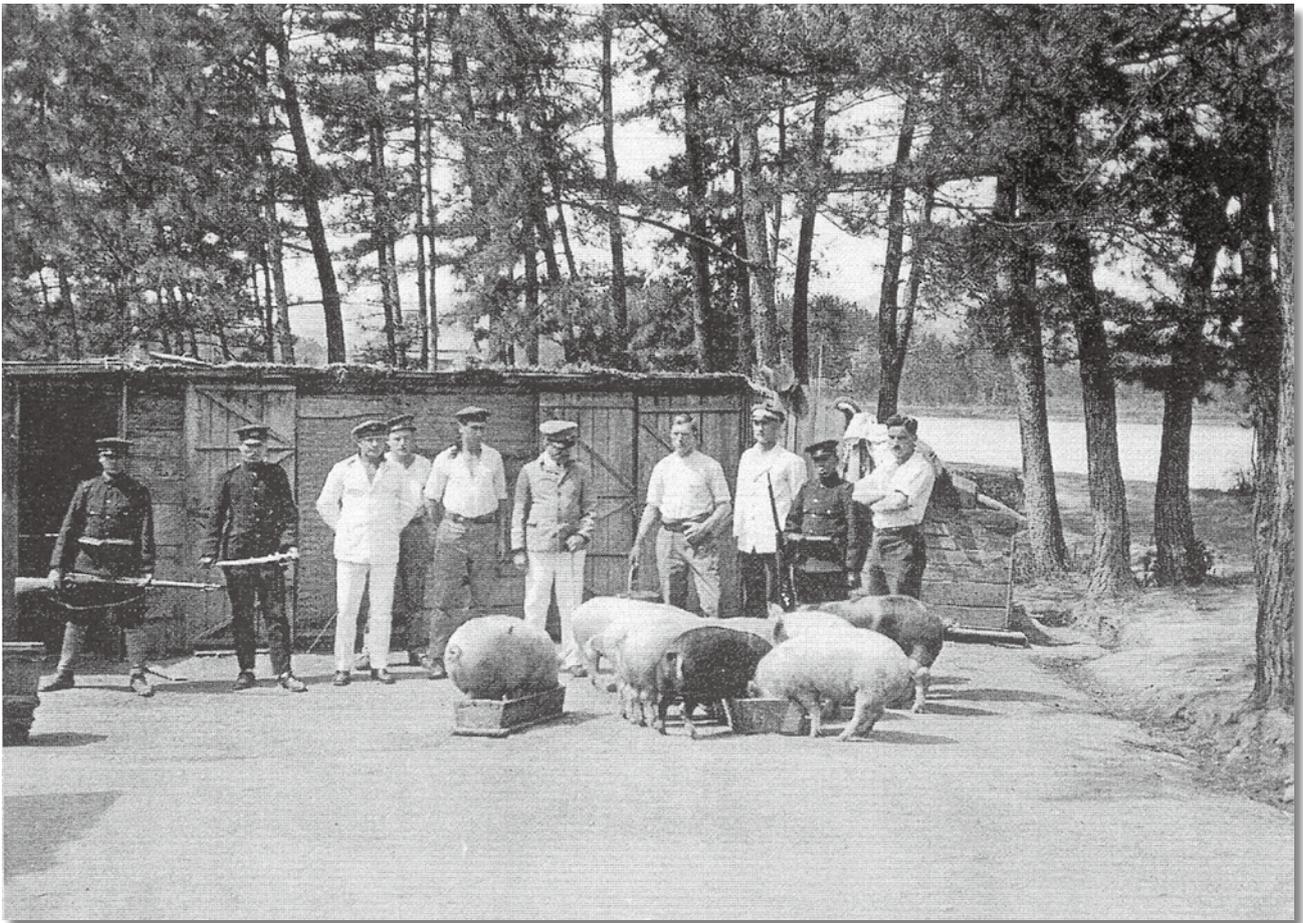
捕虜たちの要望を受けて、1918(大正7)年にパン焼きがまが設置されました。これで、捕虜たちは自らパンを焼くことが可能になりました。下の写真はパン焼き場の様子です。



豚の飼育

1918(大正7)年には、捕虜たちが豚を飼育することも許可されました。ここで育てた豚を食肉用に加工したり、ソーセージ作りに役立てていました。

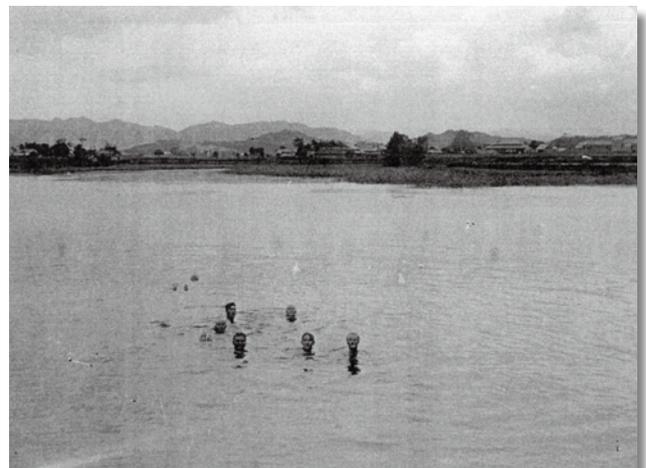
豚の飼育場は収容所近くの池のほとりに作られました。当時の写真に写っている池は、別府東町にある繁昌中池と呼ばれる池であることがわかっています。



▲ 収容所の外に作られた豚の飼育場



▲ 飼育場の現在



▲ 豚の飼育場近くの池で泳ぐ捕虜たちの写真もあります。

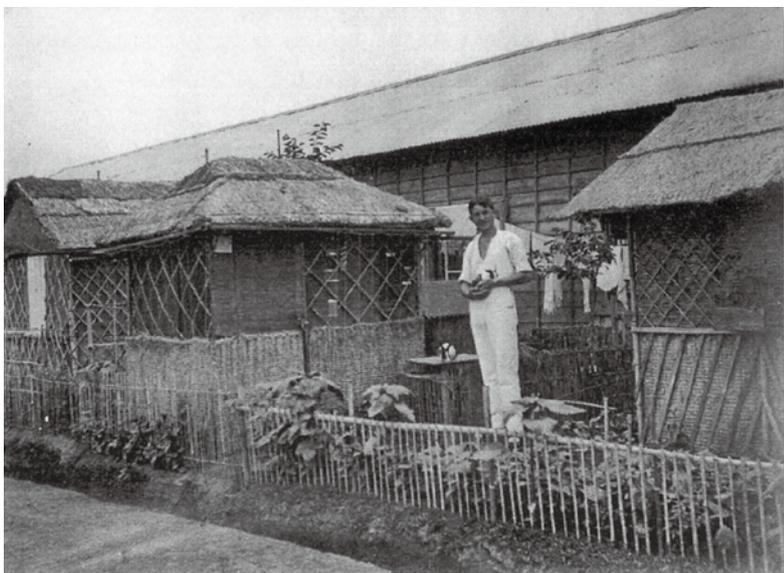
娯楽

下の写真では、捕虜たちが宿舎の中でビリヤードをしている様子が見られます。



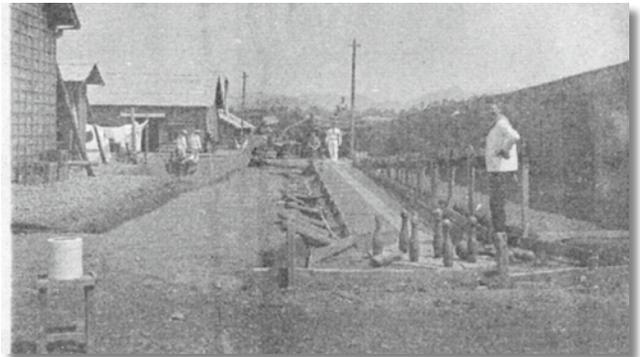
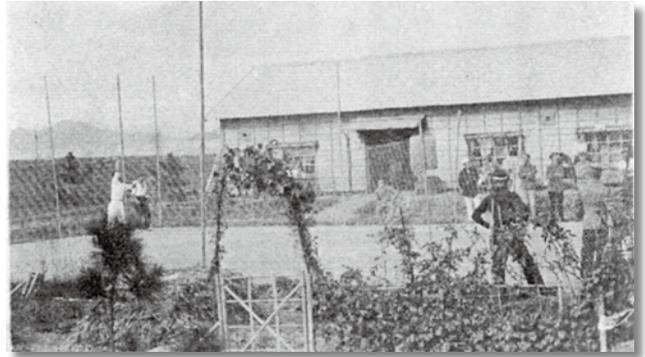
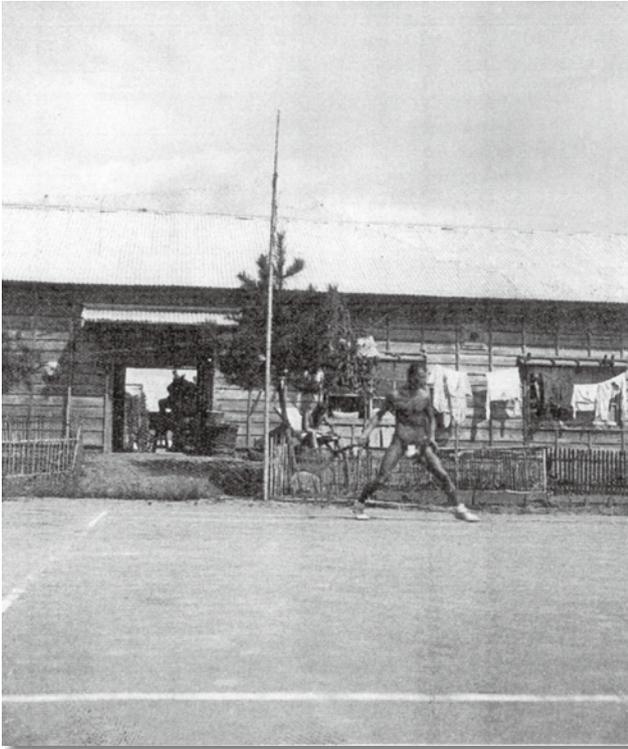
当時使われていたビリヤード台が、今も残されています。▶
球を落とすポケットのないビリヤード台が使われていました。

自分用の小屋(東屋^{あずまや})を持つことを許された捕虜もいました。下の写真のように、小屋の周りに花壇^{かたん}や菜園を作ったり、仲間を集めてお酒を飲んだりしていました。



スポーツ

収容所内にはテニスコートが作られ、ボーリングレーンまでありました。そこで、捕虜たちは日頃の運動不足を解消するために、スポーツに汗を流していました。



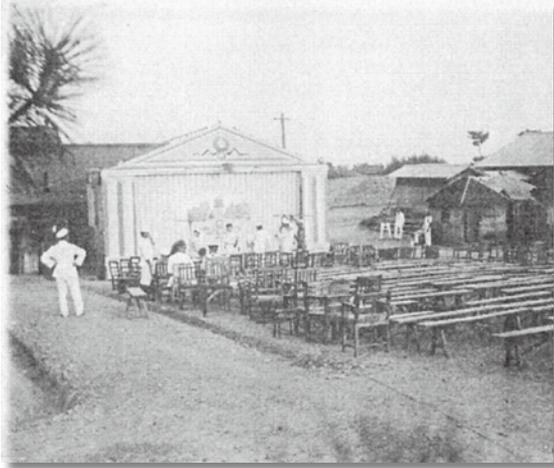
▲ 収容所内に作られたテニスコートとボーリングレーン



▲ 姫路^{しほん}師範生チームと行ったサッカーの試合後に撮られた記念写真(大正8年5月)

演奏会と演劇会

収容所内では、捕虜たちによる演奏会や演劇会が開催されていました。初めのうちはバラックで行われていましたが、手狭だったために野外劇場が作られました。



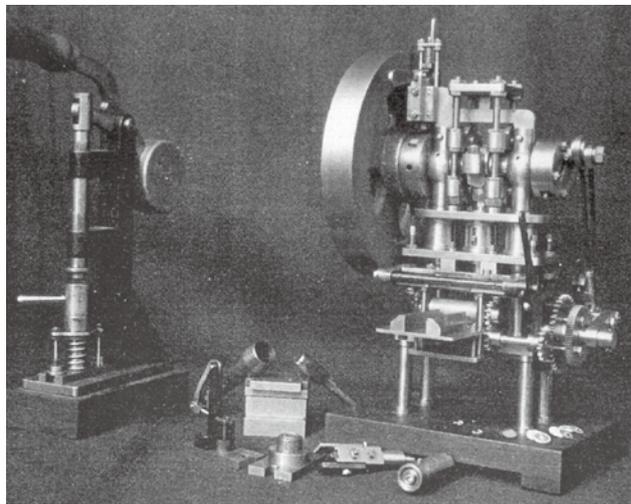
▲ 収容所内に作られた野外劇場とそこで開かれた演劇会の様子



上のチラシは、1919(大正8)年3月30日に収容所で開催された「慈善^{じぜん}コンサート」のもので、この「慈善コンサート」は、「東シベリアで苦境にある仲間たちのために」開かれたもので、演奏は「青野原収容所楽団」で、指揮は「Fr. シュテークリヒ」とあります。

展覧会

1918(大正7)年12月14～19日、青野原収容所で捕虜が製作した作品の^{てらんかい}展覧会が行われました。この展覧会には、地元の人々も多数つめかけたようで、このとき購入された品々で現在も大切に保管されているものがあります。



▲ 上の2つの品は、たばこに関する道具です。近隣住民の方が当時購入され、保管されていました。



◀ これは捕虜が描いた絵です。^{こがねいろ}黄金色に実った麦を前景にして、のどかな農家の様子を描かれています。この油絵はモデルとなった農家^{きぞう}に寄贈されました。

青野原収容所の閉鎖

青野原収容所の捕虜たちは第一次世界大戦後に帰国が許されました。1919年12月に多くの捕虜が帰国の途につきました。さらに翌1920年1月までにはほとんどの捕虜が帰国しました。こうして、青野原捕虜収容所はその役割を終え、閉鎖されました。

ドイツとオーストリア兵たちは、結局4年4ヶ月ほど青野原で捕虜として過ごしました。その期間、彼らは塙べいに囲まれた生活を強いられていましたが、塙の外の世界とつながっていました。遠足に出かけ、収容所近くで飼育していた豚の世話をし、地元の学生とサッカーの試合をしていました。彼らは、今私たちが住んでいる地域の昔の様子を目にし、そこに暮らす人々と交流していました。



現在、地域の方々が青野原捕虜収容所の保存会を立ちあげ、残された収容所施設を保存することや、青野原収容所のことを伝えていく活動に取り組まれています。

<参考にした本>

- 大津留厚、福島幸宏編『AONOGAHARA俘虜兵の世界』（『小野市史』第3巻別冊（2004年））
- 大津留厚他『青野原俘虜収容所の世界—第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵—』山川出版社（2007年）
- 大津留厚・奥村弘・長野順子『捕虜として姫路・青野原を生きる1914-1919 -箱庭の国際社会-』神戸新聞総合出版センター（2011年）
- 小野市史編纂専門委員会『小野市史』第2巻、第3巻、小野市（2003、2004年）
- 姫路市史編纂専門委員会『姫路市史』第5巻、第13巻、姫路市（1994、2002年）
- 加西市史編さん委員会『加西市史』第5巻、加西市（2004年）
- 神戸大学地域連携センター編『加西に捕虜がいた頃』加西市教育委員会（2016年）
- 藤原龍雄「第一次世界大戦と姫路俘虜収容所」（『文化財だより』第50号）姫路市教育委員会（2003年）
- 俘虜情報局『大正三四年戦没俘虜写真帖』（1918年）

青野原捕虜収容所と加西

発行日 2019年3月10日
編集 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター
発行 加西市教育委員会
印刷 株式会社ソーエイ